

中国大学生におけるキャリア目標明瞭性と 時間的展望の肯定的変化を促すソーシャル・ サポートの効果に関する縦断的検討

劉 文 静

[キーワード：①ソーシャル・サポート ②キャリア目標明瞭性 ③時間的展望 ④縦断的検討 ⑤就職活動期]

問題と目的

大学生の初期キャリア形成の課題の一つに学校から職業生活へのスムーズな移行がある。しかし日本ではフリーターやニート、無業者の増加に代表される、スムーズな移行ができない大学生の就職問題が指摘されて久しい。中国でも、近年卒業後すぐに就職しないスローな就職が問題視されている。そのため、大学生向けの職業生活へとスムーズに移行させるためのキャリア形成支援が求められる。

キャリア形成においてはキャリア目標明瞭性や時間的展望といった要因が重要なカギとなっている。キャリア目標明瞭性は求職者が就職活動の目標を明瞭にしている程度を表し、どのように仕事を見つけるかも含める概念である (Wanberg, Hough, & Song, 2002; Cote, Saks, & Zikic, 2006; 樫野, 2016; 劉, 2023a)。キャリア目標明瞭性とキャリア形成との関連については、就職決定の原因・内容に焦点をあてた研究では、キャリア目標明瞭性

が高いほど、実務的求職行動 (Liao, 2007; Wang, 2016) や就職活動の成果である就職後の雇用条件や待遇 (Cote et al., 2006; Zikic & Saks, 2009) に対して良い影響をもたらすことが明らかにされている。しかし大学生がどのようなプロセスを経て就職決定まで至っているのかという過程に着目した研究がまだ少ない。数少ない研究の中で、劉 (2023b) ではキャリア形成曲線の様相から、直線的にキャリアを形成していく「達成型」(適応的) および「漠然・なりゆき型」(不適応的)、段階的にキャリアを形成していく「ステージアップ型」(適応的) および「手段欠如型」(不適応的)、螺旋的にキャリアを形成していく「探求型」(適応的) および「無目標不安型」(不適応的) の6つの基本類型があることが指摘されている。劉 (投稿中) は就職活動の準備時期に個人の設定されている目標の明瞭度は、活動期のキャリア形成の筋道を分岐させるきっかけになり、それぞれの異なる形成プロセスを始動させながら先に進める働きを担っていることを示している。

時間的展望とは、「ある一定の時点における個人の心理的過去、および心理的未来についての見解の総体」と定義されている (Lewin, 1951 猪股 訳 1979, p. 86)。キャリア形成の原因・内容に焦点をあてた研究では、未来に向けた肯定的な時間的展望が開けてくると進路決定自己効力感が高くなり (Jung, Park, & Rie, 2015; Walker & Tracey, 2012; 富安, 1997)、キャリア成熟を促進し (長谷, 2023)、キャリア未決定を抑制する (Ferrari, Nota, & Soresi, 2010) 一方で、肯定的な時間的展望ができない仮想的有能感の高い者は就職に対するネガティブなイメージを有している (杉本・速水, 2012) ことが明らかにされている。ところで、時間的展望とキャリア形成過程との関連に関し実証的な研究はほとんど見られないが、劉 (2023b) から、これら両者の関連は、未来、現在、過去によって異なる可能性が示唆された。すなわち、仕事をしながら目標設定・保持状態に向けて積極的

に接近しようとする探求型キャリア形成は将来に対して肯定的な展望が持てている一方で、目標のない状態を排除できないという現在の否定的な現状に固着している無目標不安型キャリア形成は現在を否定的にとらえるのではないかと推測される。石井（2018）では、キャリア形成プロセスと関連深いアイデンティティ形成プロセスと時間的展望の関連を検討し、過去・現在・未来の全ての時間に対して肯定的な展望または過去のみ否定的な態度を持つ青年は、アイデンティティの各形成プロセスに適応的に傾倒している一方、否定的な過去および未来展望を持つ青年は、アイデンティティの各形成過程に傾倒しにくいことが示されている。以上の結果に鑑みると、肯定的な時間的展望が、適応的なキャリア形成の基礎となっていると考えられる。

これらを踏まえると、明確なキャリア目標と肯定的な時間的展望を形成するということは、大学生のキャリア形成支援およびキャリア教育的な観点の双方から非常に重要な意味を持つといえる。こうした明確なキャリア目標の設定や肯定的な時間的展望の形成は、時間的な制約があり、目指すべき選択や方向が明瞭でないオープン・モデル型の性質をもち（若松，2020）、そもそも困難な課題であると考えられ、その中で周りからの支援が重要になりうるだろう。しかし、大学生のキャリア目標明瞭性の向上と肯定的な時間的展望の形成を促す支援としてどのようなものが有効であるかという点について、まだ分かっていない部分が多い。本研究では大学生のキャリア目標明瞭性の向上と肯定的な時間的展望の形成を促す要因としてソーシャル・サポートに着目することとする。

ソーシャル・サポートとは、「特定個人が、特定時点で、彼／彼女と関係を有している他者から得ている、有形／無形の諸種の援助」（南・稲葉・浦，1987）である。ソーシャル・サポートに関する研究は、心理学、社会学、精神医学、看護学、社会福祉学、組織行動学などの領域で活発に

展開されている。心理学における研究では、ソーシャル・サポートの利用可能性である知覚されたサポートが中心的に検討されてきた。ソーシャル・サポートの機能的 content については研究によって一致していないが、大きく、問題解決に直接的ないし間接的に役立つ道具的サポートと、心理的な負担を緩和する（社会）情緒的サポートに分類される（浦，1992）。近年では、機能的 content よりもサポート源に基づく分類を採用する研究が多数を占めており、実証的にもサポート源内での 1 因子性を報告する研究が多い（村山ほか，2016）。

ソーシャル・サポートとキャリア形成の関連に関する研究は、進路選択場面に限定されたソーシャル・サポートと特定の場面に依存しない長期的かつ一般的な日常場面におけるソーシャル・サポートの 2 つの観点から検討を行っている。進路選択場面に限定されたソーシャル・サポートという観点からは、進路選択自己効力に対する正の影響（親から：Alliman-Brissett, Turner, & Skovholt, 2004）、キャリア・アダプタビリティに対する正の影響（親から：Guan et al., 2016）、キャリア・パースペクティブの見通しの明確性に正の影響（友人・先生から：西分・児玉，2014）、キャリア探索に対する正の影響（親から：Dietrich & Kracke, 2009；友人から：Kracke, 2002）、進路意思決定に対する正の影響（先生から：大谷・木村・藤生，2013）、キャリア不決断に対する抑制的な影響（親から：Marcionetti & Rossier, 2017）、自己理解不安の低減を介して間接的に進路未決定への悪影響を緩和する影響（友人から：水野，2015）を与えることが示唆されている。以上から、知覚された進路選択に対するサポートはおおむね進路選択や就職活動に対して良好な影響を与えていた。

また、日常場面におけるソーシャル・サポートという観点からは、進路選択自己効力（親・友人・大切な他者から：Chan, 2018）、キャリア・アダプタビリティに対する正の影響（Li, Tien, Gu, & Wang, 2023）、キャリア

選択に対する正の影響（親・友人・大切な他者から：Chan, 2018）、進路決定の際の困難さに対する抑制的な影響（親・友人・大切な他者から：He, Zhou, Li, Rao, & Yang, 2021）、時間的展望（未来）に対する正の影響（廣瀬・服巻・尾形, 2018）を与えることが示唆されている。これらの結果から、日常場面におけるソーシャル・サポートもまた、進路選択や就職活動に対して良好な影響を及ぼすといえる。

以上のように、先行研究の知見からは、知覚されたソーシャル・サポートはキャリア目標明瞭性や時間的展望に対してもポジティブな影響を与える可能性が考えられる。ところで、実証研究は極めて少なく、僅かに上述の西分・児玉（2014）、廣瀬・服巻・尾形（2018）で確認されるのみである。すなわち、キャリア目標明瞭性や時間的展望に及ぼすソーシャル・サポートの効果が十分に解明されていないのが現状である。これらのことから、本研究では、ソーシャル・サポートがキャリア目標明瞭性および時間的展望に及ぼす影響を検討することを目的とする。また、誰（サポート源）からのサポートが効果的かについては十分な知見は得られていない。そのため、本研究ではサポート源を多面的に捉え、探索的に検討する。具体的には Zimet, Dahlem, Zimet, & Farley（1988）に倣って、家族、友人、大切な人を取りあげる。

また、中国では大学進学率が急速に高まっているものの親の世代では大卒者は少なく（伊藤, 2024）、そして大卒者就職制度も 1990 年代からの統包統配（個人の生活を国家が統一的に保障し、同時に職場配置を統一的に割り振る制度）から自主的職業選択制度に変更されたため、専門的で実践的な知識を必要とする進路選択場面に限定されたソーシャル・サポートを得ることが困難な大学生も一定数いると考えられる。こうした理由から、本研究では人々の日常生活において身近なソーシャル・サポートを取りあげる。

就職活動は長期にわたるものであり、活動中の学生にとって、たとえ挫折・不採用を経験しても内定を得られるまで粘り強く続けていくことが求められる行動である。ところで近年、就職活動が長引くにつれて、就職活動を途中であきらめてしまう学生が増えることが指摘されている。このことから、大学生に対して、納得いく内定を得られるまであきらめずに活動が実行されるようなサポートが必要である。しかし、これまでの大学生における初期キャリア形成研究は就職活動を開始しない者に焦点があてられ、就職活動開始前に測定された要因が就職活動中の要因や活動に与える影響を検討した研究が蓄積されてきたが、これらの要因が終了までの就職活動全体に影響するかは明かではない。長期間就職活動に取り組み続けるために、就職活動中から終了時まで通して、キャリア目標明瞭性と肯定的な時間的展望を維持・向上することが望ましいと思われる。

そこで、本研究では、就職活動期の知覚した日常生活全般にわたる周囲からのソーシャル・サポートが終了期までのキャリア目標明瞭性と時間的展望の向上に寄与しうるのかについて検討することを目的とする。加えて、本研究では就職活動中から終了までの間のキャリア目標明瞭性および時間的展望の変化についても検討する。

方法

調査時期および調査協力者

本研究では、2023年7月に卒業予定の中国西部地域の大学4年生を対象に調査会社を通じたWeb上での以下の2回の縦断的調査が実施された。第1回目（以下T1）調査は、2023年2月下旬から3月上旬に、就職活動を行っている（未内定就活中）者に対して、実施された。第2回目（以下T2）調査は、多くの学生が内定を得る就職活動の終了時期の2023年7月下旬から9月上旬に、実施された。本研究の目的に適うため、最終的に2

回とも回答し、かつ2回目の調査時に就職活動を終了し既に内定を得ている男性58名、女性123名の合計181名のみを分析対象とした。

倫理的配慮

この調査実施においては、研究の目的と、研究への参加は任意であること、匿名性が保証されること、途中で回答・作業を中止しても不利益が生じないことなどを明記した。また、不良回答を減少させるために、真面目に回答するという宣誓を回答者に求めた。回答開始前に、以上の内容に同意した回答者だけが以後の質問に回答できるようにした。また、この調査は、中国の教育部科学技術委員会学風建設委員会（2017）が定める「人、動物を対象とする研究指針」を遵守して実施した。

調査内容

卒業までの目標明瞭性（T1に測定） job search clarity（Cote et al., 2006）の中国語版（Liao, 2007）を、項目文中に卒業の時点を示す文言を追加し、それにあわせて一部表現を修正して用いた。本尺度は5項目から構成される尺度であるが、本研究では先行研究に基づき、内的一貫性を低下させる「キャリア目標の設定を頻繁に変更する」（Liao, 2007; 劉, 2023a）を除いた4項目を採用した。各項目について、調査対象者にどの程度あてはまるかを、「1まったくあてはまらない」～「5非常にあてはまる」の5件法で回答を求めた。

卒業3～5年後の目標明瞭性（T2に測定） T1と同様に job search clarity の中国語版の4項目を、項目文中に卒業3～5年後の時点を示す文言を追加し、それにあわせて一部表現を修正して用いた。

時間的展望（T1およびT2に測定） 個人が各時間枠（過去・現在・未来）に対してどのような態度を持っているのか、を測定するために、さま

さまざまな言語に翻訳され国際的に広く使われてきた Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) (Zimbardo & Boyd, 1999) の中国語版 (Li, Wang, Lyu, Worrell, & Mello, 2023) を用いた。本尺度は、過去否定 7 項目、過去肯定 6 項目、現在衝動 4 項目、現在運命 3 項目、未来 5 項目の合計 25 項目から構成されている。回答は「1 まったくあてはまらない」～「5 非常にあてはまる」の 5 件法で尋ねた。

ソーシャル・サポート (T1 に測定) 日常生活の中で広範な結びつきをもつサポート源からのソーシャル・サポートの利用可能性に関する主観的認知を測定するために、Zimet et al. (1988) が開発した「知覚されたソーシャル・サポートの多次元尺度 (Multidimensional Scale of Perceived Social Support (MSPSS))」をもとに姜 (2001) によって作成した中国語版を使用した。本尺度は、家族からのサポート、友人からのサポート、大切な人からのサポートの 3 つの下位尺度各 4 項目ずつの 12 項目で構成されている。中国語版は大切な人からのサポート因子の質問項目中に「大切な人」の具体的な対象例として「上司、親戚、同僚など」を括弧で追加した。本研究では大学生への適用を考慮し、陈・卢・杨・张 (2016) に倣って「上司、親戚、同僚など」を「先生、同級生、親戚など」に修正した。本尺度は、家族、友人、大切な人という特定の他者についてだけでなく、総合得点を周囲の人々全般に関するサポートの指標としても使用可能である。本尺度は 7 件法で検討され始めていたが、最近中国の大学生を対象とした調査では 5 件法に改訂して使用している (周, 2021)。本研究も、5 件法 (「1 まったくそう思わない」～「5 非常にそう思う」) で回答を求めた。

フェイス項目 性別、年齢、希望進路 (1 就職、2 進学、3 起業、4 その他 (自由記述))、就職内定状況 (1 既に内定をもらっている、2 まだ内定をもらっていない) などについて尋ねた。

なお、その他の質問項目も調査票に含まれていたが、以下の分析には用

いないため、記述を省略する。

結果

尺度の構成

まず、卒業までの目標明瞭性および卒業3～5年後の目標明瞭性尺度の1次元構造を確認するために、各々について主成分分析と信頼性の検討を行った。その結果、いずれの尺度においてもすべての項目が第1主成分の中に.65以上の負荷量でまとまり、各尺度の α 係数も.80以上の値が得られた（Table 1、Table 2を参照）。両尺度とも内部構造の一次元性が支持され、一定の内的整合性を有すると考えられる。

Table 1

卒業までの目標明瞭性尺度の主成分分析結果および各項目の平均値、標準偏差

項目	負荷量	h^2	M	SD
卒業までの目標明瞭性（ $\alpha = .82$ ）				
2. 自分の卒業後の職業についてすでに計画を立てている	.89	.79	3.43	0.98
4. どのような方法で採用を実現できるのか、よく分かっている	.83	.69	3.29	1.02
3. 自分がどのような仕事を求めているのか、はっきりとわかっている	.82	.67	3.57	1.01
1. 卒業後の就職予定／希望先はまだ決まっていない R	.69	.48	2.75	1.01
寄与率	65.47%			

注）R は逆転項目を示し、平均値は逆転して得点化した上で計算した。

Table 2

卒業 3～5 年後の目標明瞭性尺度の主成分分析結果および各項目の平均値、標準偏差

項目	負荷量	h^2	M	SD
卒業 3～5 年後の目標明瞭性 ($\alpha = .91$)				
2. 自分の卒業 3～5 年後の職業についてすでに計画を立てている	.93	.87	3.45	1.02
3. 自分が卒業 3～5 年後にどんな仕事に就きたいか、はっきりとわかっている	.90	.81	3.50	1.09
1. 自分の卒業 3～5 年後の職業目標をまだ決めていない R	.89	.79	3.27	1.07
4. 卒業 3～5 年後の職業目標を達成するための方法をよく知っている	.83	.68	3.38	1.11
寄与率	78.99%			

注) R は逆転項目を示し、平均値は逆転して得点化した上で計算した。

続いて、T1 と T2 の時間的展望において先行研究 (Li, Wang, Lyu, Worrell, & Mello, 2023) の 5 因子構造 (過去否定、過去肯定、現在衝動、現在運命、未来) を確認するために ZTPI の 25 項目について確認的因子分析を行った。分析の結果、各因子に対する因子負荷量はいずれの項目も .40 以上であった (Table 3、Table 4 を参照)。適合度指標は T1 : CFI=.909, RMSEA=.052, SRMR=.067, T2 : CFI=.883, RMSEA=.065, SRMR=.077 であった。T2 の CFI の値がやや低かったものの、RMSEA は概ね許容できる値であり、この 5 因子構造は T1 と T2 においても安定していることから、先行研究の 5 因子構造が確認できたものと判断した。各因子の α 係数に関しては T1 の「現在運命」で .64 とやや低めの値であったが許容できる範囲であり、その他の因子は .74-.83 の範囲にあり、尺度の内的一貫性が確認されたと考えられる。

次に、先行研究 (姜, 2001) のソーシャル・サポート 3 因子構造 (家族からのサポート、友人からのサポート、大切な人からのサポート) を確認

Table 3

T1 の時間的展望尺度の確認的因子分析結果および各項目の平均値、標準偏差

想定の下 位尺度	因子					M	SD
	I	II	III	IV	V		
I . 過去肯定 (α=.81)							
過去肯定	1. 懐かしい光景, 音, 匂いによって, 幼い頃のよい思い出がよみがえることがよくある	.65				4.17	0.74
過去肯定	2. 昔のことを考えるのは楽しい	.64				3.81	0.94
過去肯定	5. 昔のことを思い出すと, 悪い思い出よりも良い思い出の方が全体的に多い	.58				3.87	1.03
過去肯定	7. “古きよき時代” の話が好きである	.56				4.04	0.85
過去肯定	9. 楽しかった思い出が, すぐに心に浮かぶ	.82				3.93	0.79
過去肯定	15. 幼い頃が懐かしいと思う	.70				4.02	0.82
II . 過去否定 (α=.82)							
過去否定	8. 過去のつらい経験が, 繰り返し頭に浮かぶ		.73			2.58	1.11
過去否定	12. 嫌な思い出が多いので, 過去のことは思い出したくない		.54			2.82	1.13
過去否定	13. 取り消してしまいたい間違いを過去に犯したことがある		.46			3.57	1.03
過去否定	16. 物事が期待通りにうまくいくことはめったにない		.63			3.14	1.04
過去否定	17. 若い頃の嫌なイメージを忘れることは難しい		.71			2.88	1.11
過去否定	24. 過去に起きた嫌な出来事について考えることがある		.80			2.86	1.15
過去否定	26. 人生の中でやりそこなった楽しいことについて考えることがある		.51			3.19	1.05
III . 現在衝動 (α=.75)							
現在衝動	3. 衝動的に行動することがある		.56			2.52	0.96
現在衝動	11. その場のはずみで物事を決めてしまうことがある		.77			2.28	0.93
現在衝動	22. 自分の頭ではなく気持ちに従うことが多い		.73			2.59	1.03
現在衝動	23. 興奮して我を忘れることがある		.58			2.99	1.16
IV . 現在運命 (α=.64)							
現在運命	18. 物事は変わるので, 将来の計画を立てるのは実際には不可能だ			.62		2.74	0.99
現在運命	19. 人生の進路は, 自分ではどうしようもない力によって決められている			.73		3.04	1.08
現在運命	20. どうしようもないことなので, 将来について心配しても仕方がない			.48		2.85	1.15
V . 未来 (α=.75)							
未来	4. 何かをやり遂げようとするとき, 目標を決めてそれに到達するための具体的な方法を検討する				.53	3.90	0.75
未来	6. 夜遊びに行くことよりも, 明日までにやるべきことや必要なことを終える方が大切だ				.62	3.77	1.02
未来	10. 友人や上司に対する義務は遅れずに果たす				.64	3.97	0.82
未来	21. コツコツと取り組んで時間通りに課題を終了する				.62	3.81	0.82
未来	25. 前進するためならば, 難しくておもしろくない課題に取り組むことができる				.66	3.96	0.80
因子間相関							
	I	—					
	II	-.42***	—				
	III	-.28**	.65***	—			
	IV	-.24*	.70***	.73***	—		
	V	.52***	-.23*	-.45***	-.22	—	

注) * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table 4

T2 の時間的展望尺度の確認的因子分析結果および各項目の平均値、標準偏差

想定の下 位尺度	因子					M	SD
	I	II	III	IV	V		
I . 過去肯定 ($\alpha = .81$)							
過去肯定	1. 懐かしい光景, 音, 匂いによって, 幼い頃のよい思い出がよみがえることがよくある	.56				4.08	0.73
過去肯定	2. 昔のことを考えるのは楽しい	.69				3.83	0.95
過去肯定	5. 昔のことを思い出すと, 悪い思い出よりも良い思い出の方が全体的に多い	.69				3.85	1.06
過去肯定	7. “古きよき時代” の話が好きである	.66				4.02	0.87
過去肯定	9. 楽しかった思い出が, すぐに心に浮かぶ	.61				3.92	0.77
過去肯定	15. 幼い頃が懐かしいと思う	.69				3.91	0.92
II . 過去否定 ($\alpha = .83$)							
過去否定	8. 過去のつらい経験が, 繰り返し頭に浮かぶ		.78			2.48	1.05
過去否定	12. 嫌な思い出が多いので, 過去のことは思い出したくない		.59			2.51	1.06
過去否定	13. 取り消してしまいたい間違いを過去に犯したことがある		.49			3.35	1.10
過去否定	16. 物事が期待通りにうまくいくことはめったにない		.56			3.10	1.14
過去否定	17. 若い頃の嫌なイメージを忘れることは難しい		.73			2.79	1.14
過去否定	24. 過去に起きた嫌な出来事について考えることがある		.83			2.59	1.08
過去否定	26. 人生の中でやりそこなった楽しいことについて考えることがある		.58			3.05	1.07
III . 現在衝動 ($\alpha = .80$)							
現在衝動	3. 衝動的に行動することがある		.69			2.52	0.93
現在衝動	11. その場のはずみで物事を決めてしまうことがある		.77			2.24	1.00
現在衝動	22. 自分の頭ではなく気持ちに従うことが多い		.68			2.56	1.06
現在衝動	23. 興奮して我を忘れることがある		.68			2.91	1.14
IV . 現在運命 ($\alpha = .74$)							
現在運命	18. 物事は変わるので, 将来の計画を立てるのは実際には不可能だ			.82		2.87	1.10
現在運命	19. 人生の進路は, 自分ではどうしようもない力によって決められている			.75		3.04	1.06
現在運命	20. どうしようもないことなので, 将来について心配しても仕方がない			.55		2.82	1.13
V . 未来 ($\alpha = .82$)							
未来	4. 何かをやり遂げようとするとき, 目標を決めてそれに到達するための具体的な方法を検討する				.79	3.81	0.76
未来	6. 夜遊びに行くことよりも, 明日までにやるべきことや必要なことを終える方が大切だ				.74	3.67	0.97
未来	10. 友人や上司に対する義務は遅れずに果たす				.67	3.98	0.81
未来	21. コツコツと取り組んで時間通りに課題を終了する				.70	3.71	0.84
未来	25. 前進するためならば, 難しくておもしろくない課題に取り組むことができる				.55	3.90	0.84
因子間相関							
I	—						
II	-.44***	—					
III	-.23*	.61***	—				
IV	-.19*	.57***	.59***	—			
V	.39***	-.22*	-.52***	-.42***	—		

注) * $p < .05$, *** $p < .001$

するために、MSPSS の 12 項目についても確認的因子分析を行った。その結果、3 下位尺度間の相関が高かった（大切な人と友人で $r=.90$, $p<.001$, 友人と家族で $r=.73$, $p<.001$, 大切な人と家族で $r=.67$, $p<.001$ ）。また、MSPSS の 12 項目について最尤法による探索的因子分析を行ったところ、第 1 因子の寄与率が 47.74%（固有値 6.18）、第 2 因子の寄与率が 7.76%（固有値 1.34）であったことから、第 1 因子の寄与率の高さおよび固有値落差により 1 次元構造が妥当であると判断された。そこで MSPSS の 12 項目について、1 次元性を確認するため主成分分析を行った。その結果、すべての項目が第 1 主成分の中に .65 以上の負荷量でまとり、 α 係数も .90 以上の値が得られ、一次元性が支持された（Table 5 を参照）。以下、知覚されたソーシャル・サポートの多次元尺度項目の得点を総称して、総合的なソーシャル・サポートと呼ぶ。なお、MSPSS に関して 1 次元構造を採用した研究もある（Akhtar, Rahman, Husain, Chaudhry, Duddu, & Husain, 2010）。

Table 5

知覚されたソーシャル・サポート多次元尺度の主成分分析結果および各項目の平均値、標準偏差

想定の下 位尺度		負荷量	h^2	M	SD
総合的なソーシャル・サポート ($\alpha=.91$)					
友人	6. 私の友人たちは本当に私を助けてくれようとする	.76	.58	3.91	0.81
友人	9. 私には喜びと悲しみを分かちあえる友人がいる	.76	.58	4.08	0.78
大切な人	5. 私には真の慰めの源となるような人（先生、同級生、親戚など）がいる	.75	.57	3.77	0.94
家族	4. 必要なときに、家族は私の心の支えとなるよう手を差し伸べてくれる	.74	.55	3.80	1.08
家族	8. 私は家族と自分の問題について話し合うことができる	.73	.53	3.70	1.16

友人	7. 色々なことがうまくいかない時に、私は友人たちをあてにすることができる	.72	.52	3.86	0.87
大切な人	2. 私は喜びと悲しみを分かちあえる人（先生、同級生、親戚など）がいる	.72	.51	3.87	0.97
大切な人	1. 私には困ったときにそばにいてくれる人（先生、同級生、親戚など）がいる	.70	.49	3.78	0.78
友人	12. 私は自分の問題について友人たちと話すことができる	.69	.48	4.04	0.70
家族	11. 私の家族は私が何か決めるときに、喜んで助けてくれる	.68	.46	3.71	1.09
大切な人	10. 私には私の気持ちについて何かと気づかってくれる人（先生、同級生、親戚など）がいる	.67	.45	3.90	0.84
家族	3. 私の家族は本当に私を助けてくれる	.67	.45	3.65	1.06
寄与率		51.48%			

各尺度得点の記述統計量

それぞれの尺度にて一定の内的整合性が確認されたため、以下、加算平均值得点を尺度得点とし解析に用いることとした。各尺度の平均値と標準偏差および尺度間の相関を Table 6 に示した。総合的なソーシャル・サポートと目標明瞭性について、T1 と T2 とも正の相関関係が確認された。また、総合的なソーシャル・サポートと時間的展望について、T1 と T2 とも過去肯定、未来と正相関関係を示し、過去否定、現在衝動、現在運命と負の相関関係を示した。

時期による差の検討

各尺度の調査時期による得点の変化を検討するために、対応のある *t* 検定を行った。結果を Table 7 に示した。また、効果量として 2 時点間の相関係数を考慮した Cohen's *d* を記した。キャリア目標明瞭性に有意な差が認められた（卒業までの目標明瞭性<卒業 3～5 年後の目標明瞭性）。時間

Table 6

本研究で使用した各尺度の基礎統計量と相関

	基礎統計		相関係数											
	M	SD	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
卒業までの目標明瞭性 (5 件法)														
1. 卒業までの目標明瞭性	3.26	0.81	—											
卒業 3～5 年後の目標明瞭性 (5 件法)														
2. 卒業 3～5 年後の目標明瞭性	3.40	0.95	.47***	—										
ソーシャル・サポート (5 件法)														
3. 総合的なソーシャル・サポート	3.84	0.66	.33***	.38***	—									
T1														
時間的展望 (5 件法)														
4. 過去肯定	3.97	0.62	.22**	.34***	.62***	—								
5. 過去否定	3.01	0.75	-.22**	-.14	-.42***	-.33***	—							
6. 現在衝動	2.59	0.77	-.30***	-.15*	-.39***	-.19**	.52***	—						
7. 現在運命	2.88	0.82	-.26***	-.12	-.30***	-.17*	.49***	.50***	—					
8. 未来	3.88	0.60	.40***	.38***	.45***	.43***	-.17*	-.32***	-.13	—				
T2														
時間的展望 (5 件法)														
9. 過去肯定	3.93	0.64	.19**	.24**	.49***	.64***	-.32***	-.20**	-.16*	.22**	—			
10. 過去否定	2.84	0.77	-.18*	-.06	-.28***	-.20**	.48***	.32***	.33***	-.02	-.35***	—		
11. 現在衝動	2.56	0.82	-.25***	-.23**	-.25***	-.14	.30***	.50***	.28***	-.17*	-.16*	.52***	—	
12. 現在運命	2.91	0.89	-.23**	-.40***	-.26***	-.23**	.22**	.18*	.29***	-.11	-.16*	.49***	.45***	—
13. 未来	3.81	0.64	.42***	.53***	.36***	.39***	-.22**	-.23**	-.17*	.49***	.33***	-.20**	-.41***	-.33***

注) * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

的展望については、過去否定のみに有意な差が認められ（就職活動中＞就職活動終了時）、それ以外には有意な差は認められなかった。

Table 7

T1, T2 におけるキャリア目標明瞭性と時間的展望の下位尺度の有意差検定結果

	T1		T2		<i>t</i> -value (180)	Cohen's <i>d</i>
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>		
キャリア目標明瞭性						
目標明瞭性	3.26	0.81	3.40	0.95	-2.08*	-.15
時間的展望						
過去肯定	3.97	0.62	3.93	0.64	1.02	.08
過去否定	3.01	0.75	2.84	0.77	2.91**	.22
現在衝動	2.59	0.77	2.56	0.82	0.59	.04
現在運命	2.88	0.82	2.91	0.89	-0.44	-.03
未来	3.88	0.60	3.81	0.64	1.40	.10

注) * $p < .05$ 、** $p < .01$

ソーシャル・サポートによるキャリア目標明瞭性への効果の検討

キャリア目標明瞭性の向上にソーシャル・サポートが効果を与えるかを検討するために階層的重回帰分析を行った（Table 8）。従属変数として T2 の卒業 3～5 年後の目標明瞭性を投入した。独立変数としては、Step1 で T1 の卒業までの目標明瞭性を投入し、Step2 で T1 の総合的なソーシャル・サポートを投入した。

その結果、Step1 から Step2 にかけての説明率の増分は有意であり、また Step2 における T1 の総合的なソーシャル・サポートの偏回帰係数も有意であった。したがって総合的なソーシャル・サポートはキャリア目標明瞭性の向上に効果を持つことが明らかになった。

Table 8

T2 の卒業 3～5 年後の目標明瞭性を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

	Step 1		Step 2	
	β	t	β	t
T1 卒業までの目標明瞭性	.47	7.04***	.38	5.66***
T1 総合的なソーシャル・サポート			.25	3.77***
R^2		.22***		.27***
ΔR^2				.06***

注) *** $p < .001$

ソーシャル・サポートによる時間的展望への効果の検討

時間的展望の変化にソーシャル・サポートが効果を与えるかを検討するため、従属変数を T2 の時間的展望とし、下位尺度ごとに階層的重回帰分析を行った（Table 9）。独立変数としては、Step1 には、従属変数に対応する T1 の時間的展望の変数を投入した。Step2 には T1 の総合的なソーシャル・サポートを投入した。

その結果、T2 過去肯定、T2 現在運命と T2 未来を従属変数とした場合に、説明率の増分は有意であり、また Step2 における T1 の総合的なソーシャル・サポートの偏回帰係数も有意であった。T2 過去肯定および T2 未来には正の影響を与え、T2 現在運命には負の影響を与えた。したがって総合的なソーシャル・サポートは過去肯定、現在運命、未来の肯定的な変化に効果を持つことが明らかになった。

一方で、T2 過去否定と T2 現在衝動を従属変数とした場合に、説明率の増分が有意でなかった。したがって総合的なソーシャル・サポートは過去否定、現在衝動の変化に効果を持たないことが示されていた。

Table 9

T2 の時間的展望を従属変数とした階層的重回帰分析の結果

	Step 1		Step 2	
	β	t	β	t
従属変数：T2 過去肯定				
T1 過去肯定	.64	11.19***	.54	7.55***
T1 総合的なソーシャル・サポート			.16	2.24*
R^2		.41***		.43***
ΔR^2				.02*
従属変数：T2 過去否定				
T1 過去否定	.48	7.28***	.44	6.09***
T1 総合的なソーシャル・サポート			-.09	-1.26
R^2		.23***		.24***
ΔR^2				.01
従属変数：T2 現在衝動				
T1 現在衝動	.50	7.82***	.48	6.85***
T1 総合的なソーシャル・サポート			-.06	-0.84
R^2		.25***		.26***
ΔR^2				.00
従属変数：T2 現在運命				
T1 現在運命	.29	4.09***	.24	3.20**
T1 総合的なソーシャル・サポート			-.19	-2.51*
R^2		.09***		.12***
ΔR^2				.03*
従属変数：T2 未来				
T1 未来	.49	7.50***	.41	5.72***
T1 総合的なソーシャル・サポート			.17	2.43*
R^2		.24***		.26***
ΔR^2				.02*

注) * $p < .05$ 、** $p < .01$ 、*** $p < .001$

考察

本研究では、就職活動期に知覚された日常生活全般にわたる周囲からのソーシャル・サポートが終了期までのキャリア目標明瞭性と時間的展望の変化に寄与しうるのかを検討した。

まず、基本的な分析としてキャリア目標明瞭性と時間的展望の変化を検討した。その結果、就職活動中から終了期までの半年間という期間の中では、キャリア目標明瞭性が有意に向上し、時間的展望の過去否定が有意に低下していた。すなわち、いずれも肯定的に変化していた。一方で、時間的展望の過去肯定、現在衝動、現在運命、未来の有意な変動は確認されなかった。このように、青年期は時間的展望に関して深刻な変化の起こる時期であると先行研究で指摘された（杉山，1999）が、本研究のような短期間の調査では過去否定以外の変動を捉えられなかった。今後は時間的展望の変化について、長期的なスパンで検討していく必要がある。それにしても、これまでキャリア目標明瞭性と時間的展望の変化に関する縦断研究は少なく、本研究は貴重な資料になると考えられる。

キャリア目標明瞭性の向上に対するサポートの効果

階層的重回帰分析の結果からは、キャリア目標明瞭性の向上に対するソーシャル・サポートの役割が明らかにされた。特に、T1での目標明瞭性を統制した上でそれらの関係が見られたことから、より頑健な知見であるといえよう。日常生活の中では、直接的なサポートに限らず、精神的に支えとなる存在がいる、大切な人に支えられているといったサポート感をもつことで、自分が課題に対して努力し続け、目標の明確化に取り組むことが可能になると考えられた。サポートされていると感じることが、キャリアの積極的な探索のエネルギー源といった形で、キャリア目標明瞭性の向

上に影響を及ぼすことが示唆された。このことに関連する知見として、他者志向的達成動機に関する先行研究では、周囲の他者が動機づけに重要な役割を果たすことを強調し、周囲の応援やサポートに対する感謝を意識することが、努力を動機づける源泉となりうると指摘されている（伊藤，2020）。

時間的展望の変化に対するサポートの効果

時間的展望を従属変数とした階層的重回帰分析の結果からは、従属変数に対応する T1 の変数を統制してもなお、時間的展望の指標のうち、過去肯定、現在運命、未来の肯定的な変化に対するソーシャル・サポートの役割が確認された。

まず、未来の肯定的な変化に対するソーシャル・サポートの役割が明らかにされた。日常生活の中で親からの励ましや、気持ちの理解、将来に対する懸念を示す心配、将来の期待を示す言葉をかけるといったサポートは、前に進めていく力になり、進路選択の課題への積極的に挑戦することを可能にさせることが指摘されている（成田，2016）。親からの経済的支援・情緒的支持を意識することは、親への返報へと動機づけられ、さらに経済的・職業的自立への自覚を促すとともに、現実逃避せず将来的展望を持つようになると指摘されている（石橋・林・内藤，2015）。こうしたことから、親など他者からのサポート感は就業に対する意識や動機を高めることに寄与しており、そのことが結果的に未来に対して肯定的な態度をとれるようになったのだと考えられる。ただしこの考察は推測に留まるため、継続的な検討が必要である。

続いて、現在運命の肯定的な変化についてもソーシャル・サポートによる効果がみられた。現在運命は現在の状況を運命論的にとらえ、個人の未来や人生に対し無気力で絶望した態度を意味している。就職活動を続ける

に当たり企業から不採用となる経験は避けがたく、それによって個人は自己の能力や人格が全て否定されたかのように受け取ってしまう挫折感、内定獲得の遅れや活動の長期化への不安、周囲との比較による極度の緊張状態から来る無気力など様々な影響を受けることが示唆されている（輕部・佐藤・杉江，2015）。そのため、就職活動期に多くの大学生が無気力や絶望感を経験しやすく、さらに現在に対しても悲観しやすい時期であることが考えられる。このような状況下でいざという時に周りの人が助けてくれるだろうと予期したサポートは、無気力や絶望感を抑制または改善する効果（本間・松田，2012；下坂，2001；福岡，2000；森・堀野，1997）があり、現在運命の傾向を緩和させる作用も伴っている可能性が示唆された。

次に、過去肯定の肯定的な変化に対するソーシャル・サポートの役割が明らかにされた。山田（2004）は過去体験に対する意味づけを肯定的な方向へ変化させた最も重要な要因として「他者というファクター」を見いだした。「他者というファクター」には「他者との出会い、（深い）交流、他者からの言葉かけ」などが含まれ、それによって過去への認識の再構成が促されていた。就職活動中から終了期までの半年間の中で他者からのサポートが過去肯定の肯定的な変化に効果を及ぼしたという本研究の結果は、山田（2004）の示唆から解釈されうる。

一方で本研究では過去否定の変化に対するソーシャル・サポートの役割が確認されなかった。この点について、輕部・佐藤・杉江（2015）が不採用経験の克服過程に関する研究においてその具体的な対処として、「他者への自己開示」の重要性を指摘しており、他者との感情の開示や思いの共有といったサポートが、過去否定の変化を促す可能性が示唆されたが、本研究ではその促進効果が認められなかった。その原因や本研究の知見の頑健性について、さらなるデータの蓄積が待たれる。

また、本研究では現在衝動の変化に対するソーシャル・サポートの役割

も確認されなかった。青年の時間的展望研究では研究対象が未来に偏重し、現在がこれまで注目されることが少なく、現在衝動の機能や先行要因に関連する先行研究がほとんど見当たらないことから、本研究の結果のみに基づいて身近なソーシャル・サポートが現在衝動の変化を促す効果がないと結論することはできないだろう。今後も知見を積み重ねていく必要がある。

日常場面におけるソーシャル・サポートが過去、現在、未来に対する時間的展望の肯定的な変化を促すという結果を統合的に示した研究はまだほとんどない。日常的なソーシャル・サポートの機能に関する知見を拡張した観点から、本研究は一定の価値があるものと考えられる。

本研究の実践的意義と課題

就職決定過程の中で日常的なソーシャル・サポートはキャリア目標明瞭性の向上と、過去肯定・現在運命・未来の肯定的な変化に対して有効であるという結果は、実践を考える上で重要である。大学のキャリア教育は、能力やスキルの育成に主眼を置いている。キャリア目標の明確化や肯定的な時間的展望の形成を促すために、主体的なキャリア探索能力の育成のための授業設計、インターンシップへの参加、職業情報提供など様々な取り組みが行われる。総合的な取り組みによって大学生のキャリア目標の明瞭性の向上および肯定的な時間的展望の形成が促されていく中で、周囲の他者からの日常的なサポートが効果を持っているという結果は意義深い。日常的に支え合える環境づくりが重要であることが示唆される。

しかしながら、本研究には以下に示す限界もある。

第1に、本研究ではサポート源どうしの相関が高いことから、3つのサポート源をまとめて扱っており、サポート源によって効果が異なるかが検討できなかった点が挙げられる。先行研究では、下位尺度間の相関関係 (Zimet et al. (1988) : $r=.63, .24, .34$; 谢・陈・张・洪 (2011) : $r=.53, .49,$

.53) はそれほど強くないことが報告されている。本研究と先行研究の結果の違いが、件法の改訂によるものか、調査対象者によるものか、それとも Web 調査の特性の影響によるものか、本研究からは特定できない。これらを含めて今後さらに検討を加えていきたい。

第 2 に、2 回の調査間隔の限界である。就職活動最中と終了後の 2 時点の間隔ではサポートが過去否定や現在衝動に及ぼす影響を検出するには短かったかもしれない。また、大学生の就職決定過程全般にわたって、キャリア目標明瞭性と時間的展望の肯定的変化を促すソーシャル・サポートの効果を検討する必要性が挙げられる。就職活動直前から終了期までの期間を設け、3 時点以上の縦断調査を蓄積していくことを今後の課題とする。

引用文献

- Akhtar, A., Rahman, A., Husain, M., Chaudhry, I. B., Duddu, V., & Husain, N. (2010). Multidimensional scale of perceived social support: Psychometric properties in a South Asian population. *Journal of Obstetrics and Gynecology Research*, 36 (4), 845–851.
- Alliman-Brissett, A. E., Turner, S. L., & Skovholt, T. M. (2004). Parent support and African American adolescents' career self-efficacy. *Professional School Counseling*, 7 (3), 124–132.
- Chan C. C. (2018). The relationship among social support, career self-efficacy, career exploration, and career choices of Taiwanese college athletes. *Journal of Hospitality, Leisure, Sport and Tourism Education*, 22, 105–109.
- 陈维・卢聪・杨晓晓・张进辅 (2016). 领悟社会支持量表的多元概化分析 心理学探新, 36, 75–78.
- Cote, S., Saks, A. M., & Zikic, J. (2006). Trait affect and job search outcomes. *Journal of Vocational Behavior*, 68, 233–252.
- Dietrich, J., & Kracke, B. (2009). Career-specific parental behaviors in adolescents' development. *Journal of Vocational Behavior*, 75 (2), 109–119.
- Ferrari, L., Nota, L., & Soresi, S. (2010). Time perspective and indecision in young and

- older adolescents. *British Journal of Guidance & Counselling*, 38 (1), 61–82.
- 福岡欣治 (2000). 大学生における家族および友人の知覚されたソーシャル・サポートと無気力傾向—達成動機を媒介要因とした検討— 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 14 (3), 1–10.
- Guan P., Capezio A., Restubog S. L. D., Read S., Lajom J. A. L., & Li M. (2016). The role of traditionality in the relationships among parental support, career decision-making self-efficacy and career adaptability. *Journal of Vocational Behavior*, 94, 114–123.
- He, Z., Zhou, Y., Li, F., Rao, Z., & Yang, Y. (2021). The Effect of Proactive Personality on College Students' Career Decision-Making Difficulties: Moderating and Mediating Effects. *Journal of Adult Development*, 28 (2), 116–125.
- 廣瀬春香・服巻豊・尾形明子 (2018). 大学生の困難課題解決のための努力維持要因の検討— 広島大学心理学研究, 18, 175–188.
- 本間里美・松田英子 (2012). ストレッサーと実行されたソーシャルサポートが無気力に与える影響—大学生における縦断研究— ストレス科学研究, 27, 64–70.
- 石橋里美・林潔・内藤哲雄 (2015). キャリア教育からみた大学生のキャリア目標設定行動に及ぼす要因分析— 東京未来大学研究紀要, 8 (0), 13–25.
- 石井遼 (2018). 青年の時間的展望とアイデンティティ形成過程の5側面との関連— 心理学研究, 89, 119–129.
- 伊藤忠弘 (2020). 他者志向的達成動機と自己志向的達成動機の関係性に対するパーソン志向的アプローチ：階層的クラスター分析と潜在カテゴリー分析による検討— 学習院大学文学部研究年報, 66, 143–162.
- 伊藤忠弘 (2024). 東アジアにおける就業動機の他者志向性—日本、中国、アメリカの比較— 東洋文化研究 (学習院大学東洋文化研究所), 26, 1–45.
- 姜乾金 (2001). 领悟社会支持量表 (PSSS) 张作记 (編) 行为医学量表手册 (特刊) (pp. 41–42) 北京: 中华医学电子音像出版社
- 教育部科学技术委员会学风建设委员会 (2017). 高等学校科学技术学术规范指南 中国人民大学出版社
- Jung, H., Park, I.J., & Rie, J. (2015). Future time perspective and career decisions: The moderating effects of affect spin. *Journal of Vocational Behavior*, 89, 46–55.
- 輕部雄輝・佐藤純・杉江征 (2015). 大学生の就職活動維持過程尺度の作成— 教育心理学研究, 63 (4), 386–400.
- 榎野潤 (2016). 生活保護受給者の就労支援の研究—自己制御理論に基づく求職

活動の支援研究からの考察— JILPT Discussion Paper Series DP16-05.

Kracke, B. (2002). The role of personality, parents, and peers in adolescents' career exploration. *Journal of Adolescence*, 25 (1), 19-30.

Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Harper & Brothers. (レヴィン、K. 猪股佐登留（訳）（1979）. 社会科学における場の理論（増補版）誠信書房）

Li, T., Tien, H. L. S., Gu, J., & Wang, J. (2023). The relationship between social support and career adaptability: the chain mediating role of perceived career barriers and career maturity. *International Journal for Educational and Vocational Guidance*, 23, 319-336.

Li, X., Wang, C., Lyu, H., Worrell, F. C., & Mello, Z. R. (2023). Psychometric properties of the Chinese version of the Zimbardo Time Perspective Inventory. *Current Psychology*, 42, 13547-13559.

Liao, W. (2007). A Study on student's job hunting behavior in colleges of science and business in Taiwan. Master's Thesis, Taiwan: National Central University.

劉文静（2023a）. 中国の地方大学生における自己向上志向動機およびキャリア探索とキャリア目標明瞭性との関連—進路選択に対する自己効力感の高低に着目して— キャリア教育研究, 41 (2), 47-60.

劉文静（2023b）. 大学生のキャリア形成プロセスとその特徴に関する検討：中国の若年有職者の回顧から 学習院大学人文科学論集, 32, 145-177.

劉文静（投稿中）. 大学生のキャリア形成プロセス類型の妥当性の再なる検討

Marcionetti, J., & Rossier, J. (2017). The mediating impact of parental support on the relationship between personality and career indecision in adolescents. *Journal of Career Assessment*, 25, 601-615.

南隆男・稲葉昭英・浦光博（1987）. 「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけて—若干の資料— 哲学（慶応義塾大学・三田哲学会）, 85, 151-184.

水野雅之（2015）. サポート資源の認知および活用が進路選択不安と進路未決定に及ぼす影響 カウンセリング研究, 48, 121-132.

森和代・堀野緑（1997）. 絶望感に対するソーシャルサポートと達成動機の効果 心理学研究, 68 (3), 197-202.

村山恭朗・伊藤大幸・大嶽さと子・片桐正敏・浜田恵・中島俊思・上宮愛・野村和代・高柳伸哉・明畚光宜・辻井正次（2016）. 小中学生におけるメンタルヘルスに対するソーシャルサポートの横断的効果 発達心理学研究, 27, 395-407.

- 長谷守紘 (2023). 保育・教職を志す女子大学生の時間的展望がキャリア成熟に与える影響 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学「子ども好適空間研究」, 5, 49-56.
- 成田絵吏 (2016). 青年期の進路選択に関する親のサポートの研究 名古屋大学博士論文 (心理学)
- 西分翔太・児玉真樹子 (2014). 大学生のキャリア・パースペクティブ形成に及ぼすソーシャルサポートおよびメンタリングの効果の検討 学習開発学研究, 7, 19-27.
- 大谷哲弘・木村諭史・藤生英行 (2013). 就職を希望する高校生の進路選択におけるサポート知覚と進路意思決定との関係 カウンセリング研究, 46, 127-137.
- 下坂剛 (2001). 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49 (3), 305-313.
- 杉本英晴・速水敏彦 (2012). 大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展望 発達心理学研究, 23, 224-232.
- 杉山成 (1999). 時間的展望の先行要因としての統制感 小樽商科大学人文研究, 97, 101-115.
- 富安浩樹 (1997). 大学生における進路決定自己効力と時間的展望との関連 教育心理学研究, 45, 329-336.
- 浦光博 (1992). 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学— サイエンス社
- 若松養亮 (2020). 第4章大学生の進路未決定と支援 白井利明 (編) 生涯発達
の理論と支援 (pp. 33-44) 金子書房
- Walker, T. L., & Tracey, T. G. (2012). The role of future time perspective in career decision-making. *Journal of Vocational Behavior*, 81, 150-158.
- Wanberg, R. C., Hough, L. M., & Song, Z. (2002). Predictive validity of a multidisciplinary model of reemployment success. *Journal of Applied Psychology*, 87, 1100-1120.
- Wang, J. (2016). A study on the relationship of job search clarity and job search behavior and job search outcomes. Master's Thesis. Tianjin: Tianjin Normal University.
- 谢倩・陈谢平・张进辅・洪显利 (2011). 大学生犬儒态度与生活满意度的关系: 社会支持的调节作用 心理发展与教育, 27 (2), 181-187.
- 山田剛史 (2004). 過去—現在—未来に見られる青年の自己形成と可視化によるリフレクション効果—ライフヒストリーグラフによる青年理解の試み—

青年心理学研究, 16, 15-35.

周丽梅（2021）. 大学生评价恐惧与社交焦虑的关系：压力知觉和领悟社会支持的作用 西南大学修士論文

Zikic, J., & Saks, A. M. (2009). Job search and social cognitive theory: The role of career relevant activities. *Journal of Vocational Behavior*, 74, 117-127.

Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

Zimet, G.D., Dahlem, N.W., Zimet, S.G., & Farley, G.K. (1988). The multidimensional scale of perceived social support. *Journal of Personality Assessment*, 52 (1), 30-41.

謝辞

本論文の作成にあたり丁寧なご指導を賜りました伊藤忠弘先生に心より感謝申し上げます。

A longitudinal study of the effect of social support on promoting positive changes in career goal clarity and time perspective among Chinese university students

LIU, Wenjing

Published research underscores the pivotal role of career goal clarity and time perspective in the initial career formation process. The present study aimed to investigate whether perceived daily social support during job hunting could contribute to positive changes in career goal clarity and time perspective. A 6-month longitudinal survey was conducted online, with data collected at two intervals: during the job-hunting period and upon its completion. A total of 181 university students from China's western region were used, all of whom had secured a job offer by the time of the second survey. Paired *t*-tests revealed that career goal clarity was significantly increased, while past-negative perspective was significantly decreased. Meanwhile, hierarchical multiple regression analysis indicated that perceived social support promoted positive changes in career goal clarity, past-positive perspective, present-fatalistic perspective, and future perspective, even when the dependent variable at Time 1 was controlled.

(心理学専攻 博士後期課程 3 年)